

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年12月
第102号

(毎月1日発行)

ホームページ



若作り

しても話題は

みな昭和

まさか

「息子が亡くなりました」

今月のある夜、電話がありました。大阪に暮らす息子さんが、自宅で亡くなっていたそうです。職場の人が「連絡がとれない」と言ってお家を訪ねて、発見に至りました。

「とりあえず行ってきます」

「途中、絶対に何かが起こると思って、用心して行って来て下さい」

そんなやり取りをして、ご両親の帰りを待ちました。

亡くなった息子さんは、私と同じ年でした。このご両親は、6歳の長男も亡くされていて、いよいよ2人だけが残されたのです。

しばらく私は、電話の向こうの震える声が耳から離れませんでした。

数日後、息子さんはお骨になってご両親と帰って来ました。当日は、本堂でお助めをするお約束をしていました。

本堂に入るなり、ご両親は泣き崩れました。坊主は、「主人の締め後ろにいた真珠の背中をずっとさすっていました」

何か言葉に出さないとどうにかなくなってしまいそうで、また言葉にすれば涙がこぼれてくる、そんな2人を前に、私はただそこにいることしかできませんでした。



背中がない

大阪から福山へ息子さんと帰るとき、2人は「頑張ろうね」と何度も声を掛け合ったそうです。しかししばらくして、

「これ以上、何を頑張ったらいいのだ」

という思いが頭をもたげました。そこで

「生きよう」

という言葉に交換されたそうです。

少し落ち着いた頃、私は次のことをお伝えしました。「仏教に「**仏身内蔵無背相**」という言葉があります。「完成した(円満) 仏様の身体(仏身)には背中が無い(無背相)」というのだそうです。

おかしいかもしれませんが、もし背中があると、私の方を一目でも向いてくださらない時が生じてしまいます。これから、お2人が息子さんを忘れることがあっても、息子さんがお2人を忘れることが無いのだ、と受け止めて、皆さんの人生を2人の息子さんと歩んでほしい。(つづく)

皆さん、いかがですか。本堂に生が幸せて死が不幸なら、私たちは最終的には不幸になるためにつらい思いをして毎日生きていくといえます

喉が渇いて井戸を掘り始めるのでは遅く、腹が減ったから畑を耕すのでは間に合わないのです。折に焼けて「まさか」を話してみましよう。

真宗では「後生の一大事」といいます。(住職)

お経のことば折々

観音聖人のご法事です。

ご命日は新暦では1月16日旧暦では11月28日です。



《報恩講(ほうおんこう)》

ところで、多くの方にとってご法事は「故人」が主役と思われるかもしれませんが、じつは「法事」とは「仏法事」、つまり「仏法を聞く行事」ですから、参拝者一人一人が主役です。

ということ、で、「観音聖人の法事と言われてもあなたがピンとこないなあ」という人には、「私の生き方に關わる大切な行事なのだ」と思っていたら、進んでご参拝なさることを願います。

ちょっとあたまのこりほぐし

ストロベリーは「strawberry」と書きます。

さて、何語でしょうか？

師走は特に頭をゆわらか〜く。

答えは裏面です



福泉寺公式LINE

色々送ります



おてらから

報恩講参り、年明けでもいたします

大変遅くなりましたが、今年のお参りは多くのご家庭が年明け(12月)を予定してあります。なんとぞよろしくお願い申し上げます。

除夜の鐘ライトアップ!

大晦日の夜10時より、手作り灯籠でライトアップをしようと思っております。この灯籠は「**ありがとう**」と命名し、「今年1年の間にあった感謝」を灯籠に書いてもらってロウソクで灯します。すでに準備してあります。当日も書けます。どうぞお参りくださいませ。(お土産に年越しそばを……)

将棋の内藤国雄さんの話



将棋の内藤国雄さんは、十四歳で坂田三吉名人の弟子になっている。将棋以外でも「おゆき」という歌を歌ったり、よくマスコミに登場した人でした。

その内藤さんが、もう四十数年前、西本願寺の臨時の「門主」に対談しておられる。その対談で、大山兼晴名人が十二年間守っていた王将位を獲得したときのことを次のように語っています。

二度目の挑戦で獲得したとのこと。一度目は、「負けてもともと」という言葉がきらいで、新聞記者のインタビューにも「大山名人といえども、勝つてもとものつもりで挑戦します」と答えていた。結果は七番勝負の四番ストレート負け。

そのとき負けたことは悔しくはないのだが、相手はどう見ても八割程度の方しか出してない。記者と雑談したり、余裕たっぷりの態度。その全力を出しきっていない相手に負けたのがすくなく悔しかったのだそうです。二ヶ月休み、ある時ハッと気づいた。名人は自分を甘く見ていたのではなく、二割の力を残しておく

ぐらいの気持ちで戦うことが勝ちにつながることを知っておられたのだと。

また、九段制度ができ、米永八段を破って、初めて九段になったときのことも語っています。

勝負は五番勝負。二番続けての負け。毎日イライラの生活。そんなある日、小学一年の次女が書いた「習っていること」という作文を読んだ。

傍らで次女が「お父さんは将棋を習ってるんだよね」と言います。とっさに「お父さんは習ってないよ。大先生だよ」と答えた。そのときふと「あれ、自分はいつから大先生になったんだろう」と、習う心を失っているのに気づいたとのこと。それから習う心で指そうと思ひ、気が楽になり、ストレート勝ちしたのだそうです。

【私教を断る】西原第二編HPより

以前お参りした家の七十代の男性が、「一休さん、私は七十年あまり、ずっと『こうあらねばならぬ』と思って生きてきたけれど、そんなことは無いんですね」と言われました。無我という言葉があります。無我とは、我をなくすことではなく、自己中心、自己主張の生き方を、「他があるが故に我ある」生き方に転換することです。日本人の古来の洋流さの美徳は、無我の実践でもあります。

浄土真宗の教章（私の歩む道）

【浄土真宗は奥に奥深いです。死んでからの話ではなく、いま、ここに生きる。この私が安心する教えです】

宗名 浄土真宗
宗祖(一)開山 親鸞聖人

誕生 一七三三年五月二十一日(承安三年四月一日)
往生 一二六二年一月十六日(弘長二年十一月二十八日)

宗派 浄土真宗本願寺派

本山 龍谷山本願寺(西本願寺)
阿彌陀如来(南無阿彌陀仏)

聖典 釈迦如来が説かれた浄土三部経(一)「仏説無量壽經」「仏説觀無量壽經」「仏説阿彌陀經」(二) 親鸞聖人が著述された主な聖教

宗祖 親鸞聖人が著述された主な聖教
「正信念仏偈」「教行信証」「行巻末の偈文」
「浄土和讃」「高僧和讃」「正徳末和讃」
中興の祖 蓮如上人のお手紙「御文章」

教義 阿彌陀如来の本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、この世の縁が尽きると浄土に生まれて仏となり、逆いの世に還って人々を教化する。

生活 親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿彌陀如来の信心を聞き、念仏を称えつつ、つねにわが身をひりかえり、悔悟と教誨のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御願報謝の生活を送る。

宗門 この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の集う同願教団であり、人々に阿彌陀如来の誓願と慈悲を伝える教団である。それによって、自他ともに心豊かに生きあひていける社会の実現に貢献する。